



松枝家の家と墓

松江家の家は、高巖寺の裏にあつて借家で生まれています。

松枝家の墓は、中央通りの整備により、大塚山に移転されています。大塚山の東側中央に西を向いてあります。後方は飯盛山です。



砂糖と松江兄弟

兄 松江豊寿（とよひさ）

松江豊寿は、明治五年（一八七二）六月六日会津若松市中央二丁目の高巖寺北側、高巖寺の借家において、会津藩士・警察官だった松江久平（きゆうへい）の長男として生まれます。久平は、敗戦後、斗南藩へ行きますが、明治四年の廃藩置県で斗南藩が無くなり、生活も苦しかったので、若松に戻ります。

明治二十二年（一八八九）十六歳で仙台陸軍地方幼年学校入学、明治二十五年（一八九二）陸軍士官学校入学、明治二十七年（一九一四）二十二歳で陸軍歩兵少尉となります。

陸軍時代の第一次世界大戦中、毎年末に歌われるベートーベン第九交響曲の発祥地徳島県鳴門市の「板東俘虜（ふりよ）収容所」の所長を豊寿がしていた時、日本で初めて第九が歌われました。二〇〇九年に松平健主演で映画となった「バルトの楽園」となります。バルトとはドイツ語で「ひげ」を表します。豊寿は、ドイツ人俘虜を人道的に扱い、住民とドイツ人の交流を深め、チーズやバター、ベツトも作っています。

大正三年（一九一四）一月、徳島歩兵第六十二連隊陸軍歩兵中佐となります。七月、第一次世界大戦が勃発し、中国の青島の戦いで日本軍に降伏したドイツ軍俘虜が、全国十二ヶ所の収容所へ振り分けられ、鳴門にも入

たのです。そして、十二月に徳島俘虜収容所に異動した松江がいて、大正六年（一九一七）四月には所長となります。

松江はドイツ人たちを人道に基づいて扱い、自分の裁量で、できるだけ自由に色々な行動を許していたのです。

それは、戊辰戦争で敗戦し、生まれた時にはまだ天守閣も壊されずに残り、町の南側の武家屋敷は焼け野原となっていたことを知っていたことと、西軍が、会津に対し、賊軍扱いし、悲惨な扱いを受けた実体験が、大きく係わっていたのです。それで、人道的な扱いをさせたのです。

さらに、施設の周辺の住民とドイツ人との交流や、様々な技術を指導し、養鶏、養豚、野菜作り、建築、設計と生活に役立つ分野を人々に教え交流を深めたのです。

大正九年（一九二〇）四月、第一次世界大戦が終了し、板東俘虜収容所は閉鎖されます。そして、ドイツ人の俘虜は、解放され、ドイツへ戻り、鳴門で受けた扱いを「世界のどこに松江のような（素晴らしい）俘虜収容所長がいたのだろうか」と語っていたのです。

大正十一年（一九二二）二月、陸軍少将となり、軍を去り、若松市民の推薦で市議会が市長候補となり、内務大臣が許可しました。昭和十年十二月、第九代若松市長となります。昭和三十年五月に東京都狛江市へ移転し、昭和三十一年自宅で死去しています。

遺品が残されている鳴門市のドイツ館

渦潮で知られる鳴門海峡に面する徳島県鳴門市大麻町（当時の板野郡板東町）に大正六年から大正九年（一九一七〜一九二〇）の三年間、第一次世界大戦時に日本軍の捕虜となったドイツ兵を収容した「板東俘虜収容所」が存在していました。

そこで、昭和四十七年（一九七二）元俘虜たちから寄贈された資料を中心に建設されました。

施設の老朽化や収集資料の増加により手狭になり、平成五（一九九三）東四国国体のメイン会場の一つが鳴門市となったことを記念して、新ドイツ館の建設が計画され、同年十月十三日に新築移転しました。



松江豊寿が住んでいた御葉園

松江豊寿は、大正七年（一九一八）十一月島根県浜田第二十一連隊長を最後に軍人を退役、東京の巣鴨に住んでいました。大正十一年十二月、人口四万五千の若松市長になりました。若松に家がなかったことから、御葉園に住むことになったのです。当時の若松市役所は、神明通りの東邦銀行前にありました。

市政二十五周年の開催

大正十三年十二月には、若松市政施行二十五年を開催しました。

県内初の消防自動車導入

大正十四年五月には、第五小学校（謹教小）の火災をきっかけにして、県内初の消防自動車を導入しました。

上水道の整備

大正十三年には、滝沢の上水道の建設を話し、陸軍の射撃用地に十五年に工事が始まり、昭和四年に完成します。

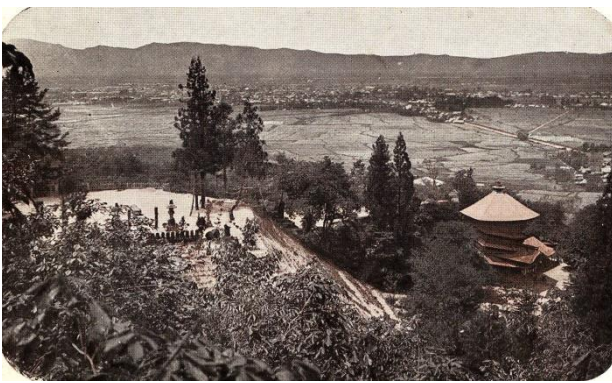


会津藩士が眠る阿弥陀寺の整備

市長を辞職した大正十四年十一月、会津弔霊義会の専務理事として会津藩士一二八一体が眠る阿弥陀寺の整備をします。仮の拝殿と若松城から移築した仮本堂の御三階はありましたが、本格的な堂はなかったため、大正十五年に本堂を整備しました。

飯盛山の整備

大正十四年からは、飯盛山に参道の整備を開始します。五二六一人の奉仕者の協力により山川健次郎の協力も得て翌年、階段が整備されます。墓域の整備は、環境破壊とした朝日新聞と山川健次郎が論争を繰り返して行きました。そして、現在のような墓域に整備されています。昭和三年には、イタリヤからポンペイの石柱が送られ、国を挙げて祝われました。昭和三年五月二十一日没します。八十四歳。





松江春次と野口英世は友達だった

松江春次と野口清作（のちの英世）は、同じ年で、清作は、会津中学（現会津高等学校）に特選生として通っていたことがあります。

二人が出会ったのは、会陽医院の渡部鼎先生に診察してもらった時でした。手の手術をした清作は、渡部医院の二階で書生として医学を目指していました。春次は、会津中学校へ通学していた時、春次と同じ教室で学ぶこともあり、春次はノートを時々貸していたこともあり、大変仲が良かったのです。



弟 松江春次（はるじ）

松江春次は、明九年（一八七六）一月十五日若松で生まれます。旧会津藩士、松江久平の次男で兄とは四歳違いです。明治二十八年（一八九五）第一回目の会津中学卒業生で、野口英世とも親交がありました。春次は家が裕福ではなかったため、会津中学校を卒業すると、家の手助けをしようと湊村（現会津若松市湊町）の小学校で代用教員として勤務したこともあります。

当初、軍人を目指しますが、体が弱かったことから、学問の道に進み、明治三十二年（一八九九）蔵前工業高等学校（後の東京高等工業学校と改称、現東京工業大学）を卒業し、大日本製糖（現大日本明治製糖）に入社します。

明治三十六年（一九〇三）農商務省の海外実業練習生試験に合格し、ルイジアナ州立大学に留学し、全米各地の製糖会社を回り製糖技術を学んだのです。

明治四〇年（一九〇七）大日本製糖に戻り、大阪工場の工場長となり、日本で最初の砂糖製造に成功しています。ところが日糖事件の発覚で大日本製糖が混乱し、かねてより台湾での製糖業に関心を持っていたことから、大日本製糖を明治四十三年（一九一〇）七月に退社しました。その後、台湾の斗六製糖、新高製糖の経営に参画しますが、両社とも他社に吸収合併されるなどの理由で大正四年（一九一五）五月に退社しました。

砂糖王となる松江春次

大正七年（一九一八）第一次世界大戦が終

了し、南洋諸島での砂糖生産に乗り出します。大正十年十一月、南洋開発株式会社を設立し、サイパン・テニヤンで砂糖キビ栽培を開始します。昭和五年には社長となり、南洋石油開発、南興水産などを起こし、「南洋開発の父」と言われるようになります。第二次世界大戦の時、アメリカ軍の最高司令官マッカーサーはサイパンにある昭和九年に建設された銅像を「マツイの銅像を壊してはいけない」と厳命を下したほどです。

会津工業高等学校機械科新設の逸話

昭和十三年の満州事変、支那事変勃発に伴う軍需工業の躍進により、生産力の拡充、資源開発のための機械技術者を大量に要求していた時で、松江氏は私財三十三万円を投じ、会津工業高等学校の機械科を設置するため努力をし、校舎の増改築と機械科の備品が購入されたのです。この寄付により校舎正面は二階建てに改築、北体操場、北の校舎全部と講堂、松江記念館とが増築されました。

そのため、同校には松枝春次の銅像があります。当時の三十三万円は、今日の数億円にのぼる金額です。（そのうち十万円を財団法人松江奨学会の基本金とし、利子をもって施設や設備の充実にあてました。当時の利子四千万で、充分活用できました。）

しかし、物価高騰により充分に生かすことができなくなり、昭和三十九年度よりは各科の優等生への褒賞に移行し、途中一時中断の後、昭和五十九年三月から松江奨学金として再開しました。昭和二十九年十一月二十九日死去しています。七十八歳。